

財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書第64集

# 中台大木戸遺跡

893-5地点

2000

千葉県横芝町  
財団法人 山武郡市文化財センター

---

なか だい おお き ど い せき  
中 台 大 木 戸 遺 跡

893-5地点

## 序 文

中台大木戸遺跡893-5地点が所在する横芝町は、千葉県の北東部、東上総地域の最北部に位置しています。この地域は、九十九里海岸平野と下総台地からなり、台地は下総台地の中央部を水源とする小河川により複雑に開析され、太平洋に流れています。また、この小河川による樹枝状の浸蝕谷が見られます。

この地域には原始・古代の人々の生活の跡が数多く確認されています。その代表として縄文時代晩期の山武姥山貝塚が全国的に有名な遺跡であります。また、町の北部を流れている栗山川の支流、高谷川流域には河川を利用したと思われる縄文時代の独木舟がたくさん確認されています。

このように古来から緑豊かな台地と太平洋に隣接した地形によって、狩猟・採集に適した環境がもたされた地域であります。

横芝町では、さわやか畜産総合整備事業（堆肥舎建設）が計画され、平成10年7月に確認調査を実施し、古墳時代後期から奈良・平安時代までの集落跡が確認され、本調査を同年10月に実施しました。

調査の結果、住居跡・掘立柱建物跡が検出され、稲を収穫するための鉄製の鎌等が確認されました。

このほど中台大木戸遺跡893-5地点の発掘調査の成果がまとめ、報告書として刊行する運びとなりましたが、本書がこの地域の歴史を解明する手掛かりとして、学術資料はもとより、広く一般に普及することを願ってやみません。

最後にあたり、調査・整理にあたり終始ご指導をいただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課をはじめ、関係諸機関及び関係各位に心からお礼申し上げます。

平成12年1月

財団法人山武郡市文化財センター  
理事長 小 倉 幸

## 凡 例

1. 本書は、横芝町によるさわやか畜産総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に所収する内容は、千葉県山武郡横芝町大木戸893-5ほかにある発掘調査の成果である。
3. 現地調査及び整理作業は、不特定遺跡発掘調査事業として、県費補助及び町費により千葉県教育庁生涯学習部文化課及び横芝町教育委員会の指導のもと下記のとおり実施した。  
確認調査 平成10年7月2日～同年7月6日 面積 193㎡/1,923㎡ 平山誠一  
本 調 査 平成10年10月12日～同年10月19日 面積 490㎡ 山口直人  
整理作業 平成11年6月22日～同年7月31日
4. 整理作業及び報告書作成は、調査課長 大野康男の指導のもと副主査 平山誠一が担当した。縄文土器は中野修秀に協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は平山が行った。
6. 調査で使用した遺跡番号は当センター独自のコード番号を使用し、「山・文・セ-149」である。
7. 出土遺物、図面、写真等の記録類は、財団法人山武郡市文化財センターが保管している。
8. 本書の第1図に使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1・多古及び成東である。
9. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関にご指導とご協力を頂いた。  
千葉県教育庁生涯学習部文化課、横芝町教育委員会、横芝町福祉課

## 用 例

1. 本書で用いた遺構番号は調査時のものをそのまま使用した。
2. 本文中の遺構名は、ローマ字の略号を用い、下記のとおり記号化した。  
H-竪穴住居跡 B-掘立柱建物跡 P-ピット
3. 挿図縮尺は基本的に下記のとおりである。  
遺 構 竪穴住居跡 1/80 掘立柱建物跡 1/80 ピット 1/40  
遺 物 縄文土器 1/2 土師器 1/4 鉄製品 1/2
4. 土器実測のうち、黒色処理が施されているものはスクリーントーンNo111で示した。

## 本文目次

序文	
凡例	
用例	
第1章 序章	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2章 検出した遺構と遺物	4
第1節 竪穴住居跡	4
第2節 掘立柱建物跡	9
第3節 ビット	10
第4節 その他の遺物	12
第3章 まとめ	13

## 挿図目次

第1図 中台大木戸遺跡893-5地点及び周辺の遺跡	第7図 H-002号実測図
第2図 遺跡地及び周辺の地形	第8図 H-002号出土遺物
第3図 確認トレンチ及び遺構配置図	第9図 B-001号実測図
第4図 H-001号実測図	第10図 B-002号・003号実測図
第5図 H-001号出土遺物	第11図 P-001号～P-005号実測図
第6図 H-001号出土鉄製品	第12図 遺構外出土遺物

## 表目次

第1表 H-001号土器観察表	第3表 穂柄具計測表
第2表 手鎌計測表	第4表 H-002号土器観察表

## 図版目次

図版1 1. 調査前	図版3 出土遺物
2. 全景	
3. H-001号・002号	
図版2 1. H-002号	
2. B-001号	
3. B-002・003号	



第1図 中台大木戸遺跡893-5地点及び周辺の遺跡

## 第1章 序 説

### 第1節 調査に至る経緯と経過

中台大木戸遺跡893-5地点は、横芝町がさわやか畜産総合整備事業として中台大木戸地区に堆肥舎建設が計画された。産業課から教育委員会を経て候補地の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が平成10年4月8日付けで提出された。これを受け、千葉県教育庁生涯学習部文化課及び横芝町教育委員会により協議された。協議の結果、千葉県埋蔵文化財分布地図(2)によれば、候補地が中台A遺跡として周知されている遺跡範囲であるため、その旨を平成10年4月22日付けで回答された。その後、遺跡の取扱いについて千葉県教育庁生涯学習部文化課及び横芝町教育委員会、横芝町産業課の三者間で協議を重ね、現状での保存が困難な範囲について記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財団法人山武都市文化財センターが受託し発掘調査を実施した。

調査は確認調査を平成10年7月2日から同年7月6日まで実施した。その結果、古墳時代から平安時代までの集落跡であることが確認され、建物を建設する範囲については本調査を実施することになった。本調査は平成10年10月12日から同年10月19日まで実施した。

### 第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡(第1～3図)

中台大木戸遺跡が所在する横芝町は、千葉県の北東部、下総台地の南東部と九十九里平野部の中央部から北よりに位置する。町域は北西から南東にかけて長く、北側の町境は栗山側が太平洋に流出している。

本遺跡が所在する台地は、栗山川の支流高谷川の右岸で松尾台の長熊支谷や中台支谷、牛熊支谷のちょうど谷頭部付近にあたる。標高は41.5m前後で、北側は芝山町、南側は松尾町で行政境界の付近に位置している。また、全国的に有名な中台古墳群(芝山古墳群)が直線にして約1.5kmほどに所在する。

以下主な遺跡について概観すると、本遺跡の北側約2kmには縄文期の独木舟(2・5～7・9・10)が多数確認された高谷川流域が所在する。またそれに伴うように貝塚遺跡が点在する。さらに、平成10年度に調査が実施された上滝ノ下遺跡(11)が所在し、古墳時代から平安期にかけての耕作跡(水田跡)が初事例として発見された。

なお、遺跡周辺は縄文時代から多数の遺跡地が周知されているため、今回は古墳時代以降の遺跡を主に第1図に掲載した。古墳では中台古墳群のほか高谷川流域では、芝山町殿部田古墳群(4)が所在する。芝山には博物館により昭和48年に調査が実施され、前方後円墳4基、円墳13基が確認されている。また、前方後円墳(5号墳)には埴輪が樹立され、形象埴輪等が確認された。本遺跡の西側には芝山町小池古墳群(前方後円墳2基、円墳6基)が所在する。昭和31年に早稲田大学によって調査が行われている。南側に目を転じるとゴルフ場造成に伴い、南長山野遺跡(36)、西長山野遺跡(37)、北長山野遺跡(38)、東長山野遺跡(39)等が位置する。これらの遺跡はすでに調査が行われており、(36)、(38)は横芝町教育委員会が(37)、(39)は千葉県文化財センターがそれぞれ実施し、調査成果がまとめられている。集落跡としては長倉宮遺跡(16)や本遺跡の北側隣接地には中台上仇市A遺跡(42)が平成7年度確認調査を実施し、古墳時代から奈良・平安時代に至る集落跡を確認している。

1. 中台大木戸遺跡 2. 高谷川低地遺跡C地点 3. 折戸遺跡 4. 殿部田古墳群 5. 高谷川低地遺跡B地点 6. 高谷川低地遺跡D地点 7. 高谷川低地遺跡A地点 8. 谷台遺跡 9. 高谷川遺跡 10. 木

第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡



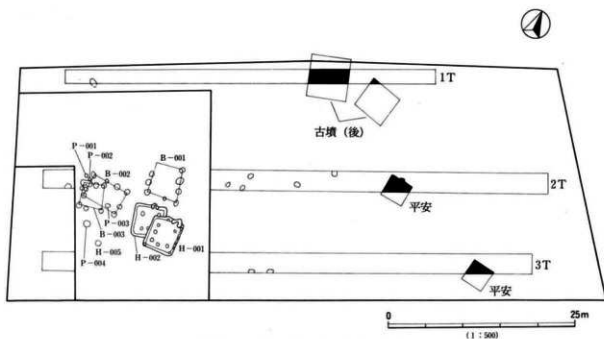
第2図 遺跡地及び周辺の地形



戸台低地遺跡 11, 上滝ノ下遺跡 12, 町原古墳群 13, 野中台遺跡 14, 中洞遺跡 15, 大山遺跡 16, 長倉宮脇遺跡 17, 長倉遺跡 18, 枕田遺跡 19, 子の神遺跡 20, 遠山並塚遺跡 21, 遠山天ノ作遺跡 22, 庚塚遺跡 23, 四ツ塚遺跡 24, 江戸山遺跡 25, 大谷遺跡 26, 中谷遺跡 27, 谷津遺跡 28, 前畑遺跡 29, 大塚遺跡 30, 朝ヶ岡遺跡 31, 富士見台遺跡 32, 大日塚遺跡 33, 長山遺跡 34, 桜前遺跡 35, 上仁羅台遺跡 36, 南長山野遺跡 37, 西長山野遺跡 38, 北長山野遺跡 39, 東長山野遺跡 40, 角田遺跡 41, 石作台遺跡 42, 中台上仇市A遺跡 43, 中台A遺跡 44, 中台石作遺跡 45, 中台西長山遺跡 46, 中台永作遺跡 47, 山伏谷遺跡 48, 五郎谷遺跡 49, 向野遺跡 50, 中台古墳群(芝山古墳群) 51, 鯉ヶ窪遺跡 52, 中台B遺跡 53, 中台遺跡 54, 太郎谷遺跡 55, 中台D遺跡 56, 新林遺跡 57, 松原遺跡 58, 新起遺跡 59, 大山遺跡 60, 小池古墳群 61, 井戸作遺跡 62, 丸辺遺跡

## 遺跡周辺の参考文献

1. 1975 『横芝町史』 横芝町史編纂委員会
2. 伊藤一男 1983 『長倉宮脇』 横芝町教育委員会
3. 中西克也他 1985 『長倉宮脇』 横芝町教育委員会
4. 太田文雄他 1992 『上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡』 鈞千葉県文化財センター
5. 1996 『年報No.11』 鈞山武都市文化財センター
6. 1999 『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)』(改訂版) 千葉県教育委員会



第3図 確認トレンチ及び遺構配置図

## 第2章 検出した遺構と遺物

## 第1節 竪穴住居跡

## H-001号 (第4~6図 図版1・3)

H-002号と重複関係にある。本跡が新しい。プランは長方形を呈し、北西コーナーがやや丸みを持つ。規模は長軸4.43m×短軸4.02m、壁高は51~62cm、床面積12.6m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-1'-Wを示す。周溝は全周する。幅19~38cm、深さ7~12cmである。また、東壁及び南西コーナー部には壁柱穴(P-6~P-11)を有する。さらにP-12はカマドを再構築した段階に新設した壁柱穴である。壁柱規模はP-6(20×18×16cm)、P-7(26×20×41cm)、P-8(28×25×36cm)、P-9(30×23×18cm)、P-10(31×27×31cm)、P-11(18×13×25cm)、P-12(28×24×39cm)を計測する。主柱穴は4本検出され、いずれも四隅を結ぶ対角線状に位置する。径・深さはP-1(54×53×54cm)、P-2(50×43×57cm)、P-3(55×42×53cm)、P-4(42×37×69cm)である。いずれの柱穴もほぼ円形に近いプランである。床面の状況は主柱穴間及び南壁に堅緻な面が広がっている。他は軟質で褐色土を主体とする。また、南壁中央部付近には出入口ピットと思われるP-5を確認する。径・深さは51×35×16cmで底面は2ヶ所見られ、移動したことが窺える。

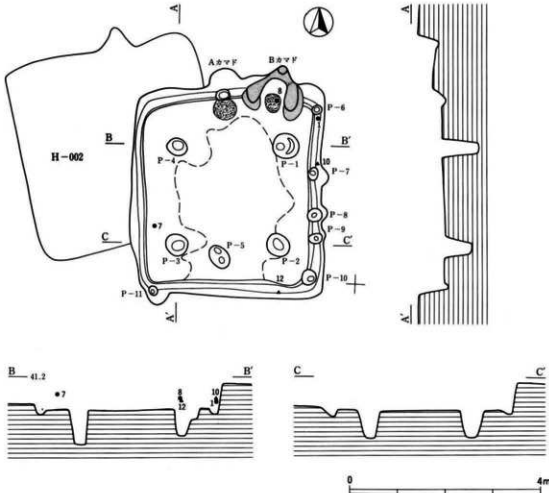
覆土は4層に分層され自然堆積で、黒褐色土及び褐色土が主体となる。

カマドは北壁北東コーナー部付近に確認された。また、北壁中央部には火床部(50×46cm)が確認され、旧カマドの火床部と思われ、造り替えにより移動したことが判明した。造り替えられたカマドの規模は東西1.3m、南北1.15mで褐色土及び山砂の混合土によって構築されている。火床部は楕円形を呈し、東西33cm、南北39cmで厚さ5cmである。

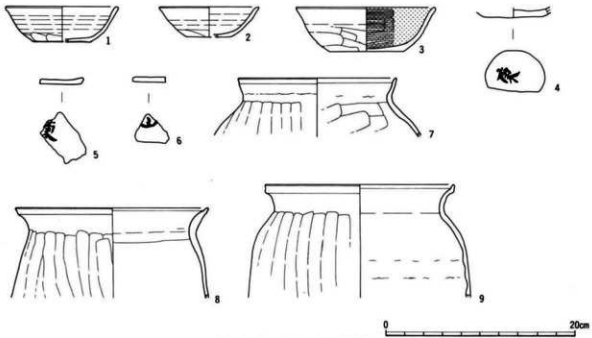
出土遺物は土器9点、鉄器3点である。1から3は土師器で、いずれも体部下端手持ちヘラ削りが施され、底部は切り離し後手持ちヘラ削りが見られる。3は体部内面磨き後、炭素吸着による黒色処理が確認される。4から6も土師器で底部面には墨書されている。4・5は「東」と判読できる。6は破片部のため判読できない。7から9は土師器でいずれも胴部下位から底部を欠損する。7は頸部がくの字状を呈し、口縁部は垂直気味に立ち上がる。8・9は口縁部がコの字状を呈し、口唇部はつまみ上げられている。10から12は鉄製品の鎌である。10は切先部を欠損する。11は切先部の遺存である。いずれも根株切り用の鎌であろうか。12は両端部に孔が見られ穂柄具である。

## H-002号 (第7・8図 図版1~3)

H-001号と重複し本跡が古い。プランはH-002号により重複部は破壊されているが、ほぼ正方形に近いと思われる。規模は長軸4.25m×4.02m、壁高35~41cmである。主軸方向はN-15'-Wを示す。周溝は全周したものと思われる。検出した周溝の幅は24~32cm、深さ2~9cmである。主柱穴は四隅を結ぶ対角線上に4本配置され、円形プランである。径・深さはP-1(44×40×67cm)、P-2(42×42×42cm)、P-3(45×40×67cm)、P-4(57×54×54cm)である。床面の状況は主柱穴間に堅緻な床面が広がっているが比熱を受け、やや焼土化している。また、炭化材を多く含む火災に遭遇した住居であったことが推察される。さらに焼土化した範囲には床直上面から炭化粒が密に含まれていた。特に炭化材は西壁の北西コーナーよりが集中して検出された。南壁中央部よりには出入口ピットを確認する。しかしH-001号によって遺存が悪く、三日月状に残存していた。深さは7cmほどで非常に浅い。

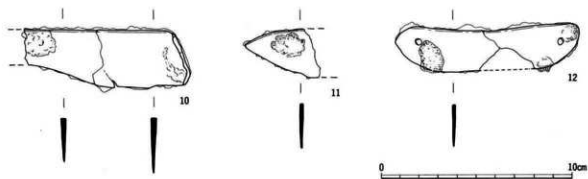


第4図 H-001号実測図



第5図 H-001号出土遺物

第1節 竪穴住居跡



第6図 H-001号出土鉄製品

第1表 H-001号土器観察表

( ) 推定値 < > 現存値

番号	器種	遺存度	法量cm	成形・調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
			口・底・高					
1	土師器 環	1/3	(12.0) (6.0) 3.7	体部外面クロロ目が明瞭。体部下 端手持ちへら削り。底部は回転糸 切り後一方向のへら削り。	雲母 小石	普	褐褐色	
2	土師器 環	1/3	(10.6) (4.8) 3.2	体部下端手持ちへら削り。底部は 多方向のへら削り。	白色粒 小石	普	薄橙褐色	
3	土師器 環	1/2	(14.8) (4.6) 7.8	体部外面中位～下位で手持ちへら 削り。底部は回転糸切り後一方向 のへら削り。内面は黒色処理。	白色粒 小石	やや甘	橙褐色	内面炭素吸着
4	土師器 環	底部片		体部下端手持ちへら削り。底部は 多方向のへら削り。	赤色粒	普	薄橙褐色	墨書「東」
5	土師器 環	底部片		底部は手持ちへら削り。	石英 白色粒	普	赤褐色	墨書「東」
6	土師器 環	底部片		底部は回転糸切り後周縁部を手持 ちへら削り。	赤色粒	普	薄橙褐色	墨書「□」
7	土師器 甕	口～胴 1/6	(16.8) <6.2>	口縁部は縦横痕が残る。胴部外面 縦方向のへら削り、内面横方向の へら削り。	雲母	やや甘	橙褐色	
8	土師器 甕	口～胴 1/5	20.6 <9.5>	口縁部はコの字状を呈する。胴部 外面縦方向のへら削り、内面横方 向のナデ。	白色粒 砂粒	普	暗褐色	
9	土師器 甕	1/2	(20.0) <11.9>	口縁部はコの字状を呈する。胴部 外面縦方向のへら削り、内面横方 向のナデ。内面縦横痕が目立つ。	砂粒 小石	甘	赤褐色	

第2表 手鎌計測表

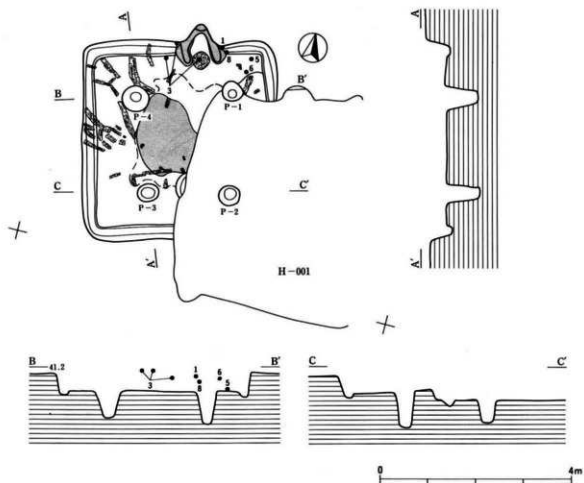
単位 cm

番号	現存長	幅	厚さ	重量g	出土位置	備考
10	8.9	1.9～3.0	0.2～0.3	28.0		
11	3.95	2.55	0.15	5.3	覆土下位	

第3表 徳筒具計測表

単位 cm

番号	現存長	幅	厚さ	孔数	孔径	重量g	出土位置	備考
12	9.7	2.4	0.15	2	0.3×0.35	16.0		



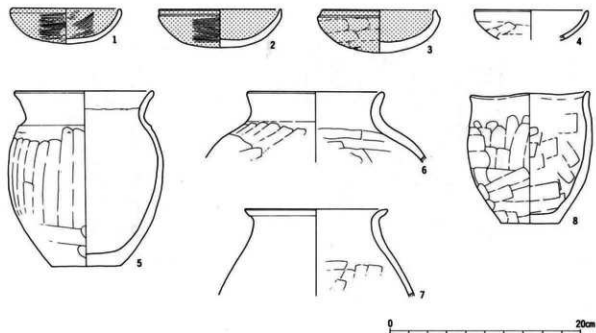
第7図 H-002号実測図

覆土は褐色土を主体とした人為堆積土で炭化材や焼土を多量に混在していた。

カマドは北壁中央部から東寄りに位置する。規模は東西1.03m、南北0.94mで構築材は褐色土と山砂を混合したもので、比較的に遺存状況は良好であった。火床部は38×33cmの円形に近いプランであり、厚さは3cmほどである。

出土遺物は図示できたものは8点ですべて土師器である。1から4は坏でいずれも未クロク段階の成形である。1から3は内外面へラ磨き後黒色処理が施され、所謂焼き付け塗布による漆仕上げと考えられる。また、2・3は口縁部と体部の境に緩やかな稜を持ち口唇部は細くなっている。3は口縁部に比して底部あたりが肥厚する。さらに体部内面は漆仕上げ後、再度樹脂により上塗りを実施していることが観察された。5から8は甕である。5は胴部と頸部の境に段を有し、頸部はくの字状に外反し、内面は紐積痕が残る。6は胴部胴部が丸みを持ち、やや大きめな甕であろうか。器厚は肥厚し、頸部は丸みを持ちながら外反し、垂直気味に立ち上がる。7は胴部はハの字状に広がり、中位あたりに最大径を有する形態のもので、頸部は強く外反し、口唇部までは短く立ち上がる。8は器厚が全体的に厚く、頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は若干外反する形態の甕である。

第1節 壑穴住居跡



第8図 H-002号出土遺物

第4表 H-002号土器観察表

( ) 推定値 < > 現存値

番号	器種	遺存度	法 量cm		成形・調整の特徴	胎土	焼成	色 調	備 考
			口・底・高						
1	土器器 環	完	11.8	3.7	内外面へラ磨き後黒色処理。	小 石 赤色粒	良	薄 褐色	漆仕上げ
2	土器器 環	1/2	(13.0)	4.0	内外面へラ磨き後黒色処理。内面 上位は横方向の丁寧なナデ。	雲 母	やや甘	褐 色	漆仕上げ
3	土器器 環	ほぼ完	12.0	<4.5>	内外面へラ磨き後黒色処理。	砂 粒	やや甘	褐 色	漆仕上げ後再度内 面は二度塗りを施 す。
4	土器器 環	底部欠損	(12.0)	<3.1>	内面丁寧なナデ。	白色粒	普	黒 褐色	
5	土器器 甕	5/6	14.8	7.4 18.5	口縁部横方向のナデ。胴部外面縦 方向のへラ削り、下位で横方向の ナデ。	白色粒 石 英	普	暗赤褐色	胴部最大径16.4
6	土器器 甕	口縁部 ? 胴部片	(14.2)	<7.5>	口縁部内外面横方向のナデ。胴部 外面斜方向のへラ削り、内面横方 向のナデ。	砂 粒 白色粒	普	褐 色	
7	土器器 甕	1/5	(15.0)	<9.3>	口縁部内外面横方向のナデ。胴部 外面丁寧なナデ、内面縦・横方向 のへラ削り後、横方向のナデ。	雲 母 白色粒	普	褐 色	
8	土器器 甕	ほぼ完	12.6	6.0 13.5	口縁部内外面とも横方向のナデ。 胴部外面縦・横方向のへラ削り、 内面横方向のへラ削り。	白色粒 小 石	普	暗 褐色	胴部最大径13.0

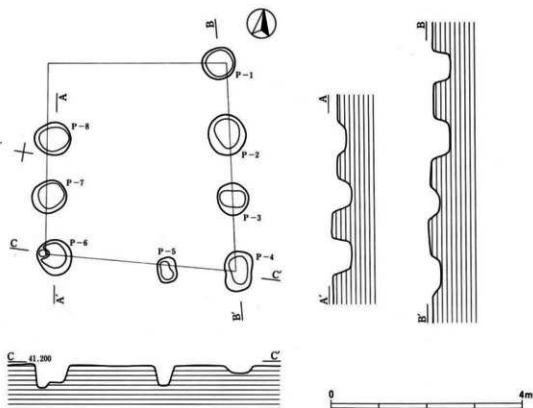
## 第2節 掘立柱建物跡

## B-001号 (第9図 図版2)

単独の建物である。3間×2間の側柱建物であると思われるが、南辺の中間の柱が東寄りに位置する。また、北辺の中間の柱と西辺の北側柱穴が検出されなかった。規模は桁行3間で4.51m、柱穴間は1.5m間隔となる。しかし、西辺の一边は計測できないが柱穴間は1.25mと東辺に比して狭く、そのためにプランは歪んだ長方形を呈するものと考えられる。梁行は南辺で3.93mである。柱穴の掘り方は径51~90cm、深さ14~40cmである。主軸方向はN-10°-Wを示す。

出土遺物は土師片を6点出土した。いずれも図化する程の遺存ではないが、土器の特徴から9世紀代の所産である。

P-1 90×67×-57cm P-2 78×84×-42cm P-3 65×66×-23cm P-4 60×82×-15cm  
P-5 42×51×-33cm P-6 71×75×-40cm P-7 73×68×-38cm P-8 80×68×-14cm



第9図 B-001号実測図

## B-002号 (第10図 図版2)

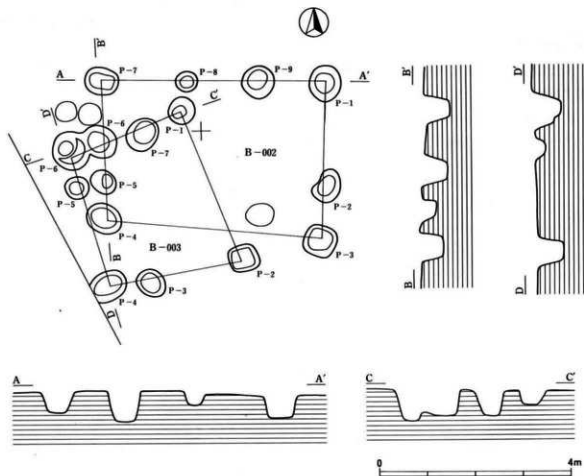
B-003号と重複する。3間×3間の側柱建物である。この建物も変則的で南辺には中間の柱穴がまったく検出されなかった。また、東辺は西辺3間に対して2間であり、中間の柱穴が1基欠ける。規模は桁行4.8m、梁行3.3mで、梁行である東辺に比して西辺は40cmほど短く、プランはやや歪んだ長方形を呈する。柱穴の掘り方は径42~78cm、深さ18~60cmである。主軸方向はN-87.5°-Wを示す。

出土遺物は10点を越えるがいずれも図下できる程のものではなく、小片であった。これらの土器片の特徴

## 第2節 掘立柱建物跡

から9世紀代の所産と思われる。

P-1	74×66×-39cm	P-2	50×69×-53cm	P-3	64×67×-18cm	P-4	73×60×-43cm
P-5	55×48×-32cm	P-6	78×68×-52cm	P-7	57×69×-46cm	P-8	42×42×-27cm
P-9	66×68×-60cm						



第10図 B-002号・003号実測図

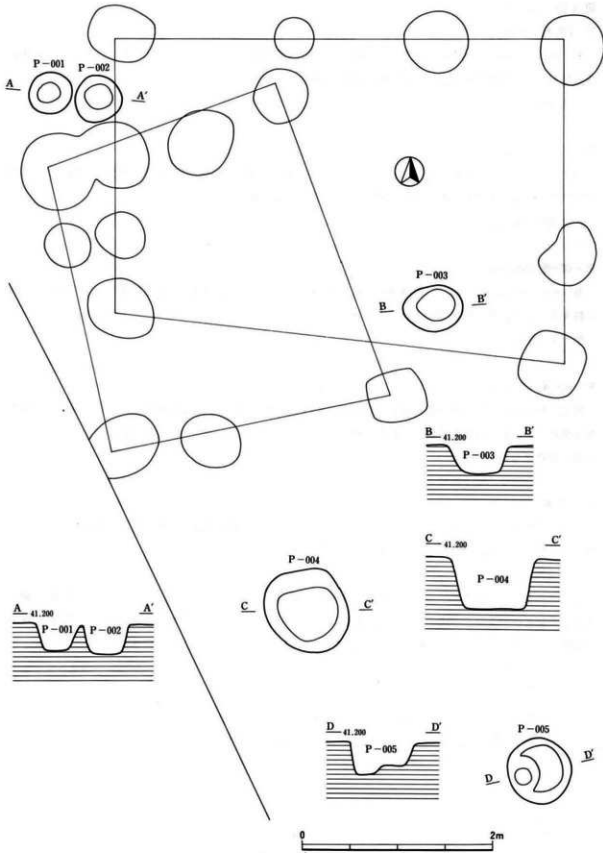
### B-003号 (第10図 図版2)

B-002号と重複する。2間×2間の側柱建物である。本建物が新しい。この建物も変則的で東辺はまったく中間の柱穴がなく、西辺で北寄りに中間の柱穴を確認した。また、北辺及び南辺では北辺が中間の柱穴が東よりに確認され、南辺の中間の柱穴は西寄りに確認され、企画性がまったくない。桁行3.2m、梁行2.7mで東辺が西辺に比して35cmほど長い。そのためプランはやや歪んだ長方形を呈する。柱穴の掘り方は径46~80cm、深さ12~60cmである。主軸方向はN-18.5°-Wを示す。

出土遺物はないが、状況から見ておそらく9世紀代の所産であろうか。

P-1	57×57×-30cm	P-2	61×53×-12cm	P-3	66×57×-22cm	P-4	(71)×61×-55cm
P-5	50×46×-29cm	P-6	80×79×-60cm	P-7	65×74×-54cm		





第11図 P-001号~P-005号実測図

### 第3節 ビット

#### 第3節 ビット

##### P-001号 (第11図)

B-002号の西隣に位置する。プランはほぼ円形で、規模は46×43×-27cmである。覆土は褐色土を主体に焼土粒を含む。断面形態は隅丸の逆台形状を呈する。

出土遺物はない。

##### P-002号 (第11図)

B-003号に北隣に位置する。プランはほぼ円形で、規模は50×51×-31cmである。覆土は暗褐色土を基調として若干の焼土を含む。断面形態は隅丸の逆台形状を呈する。

出土遺物はない。

##### P-003号 (第11図)

B-002号内に位置する。プランは楕円形で、規模は62×46×-27cmである。覆土は褐色土を基調としローム粒を多く含む。断面形態は隅丸の逆台形状を呈する。

出土遺物はない。

##### P-004号 (第11図)

単独でやや歪んだ楕円形を呈する。規模は94×83×-52cmである。覆土は褐色土と暗褐色土を基調に焼土粒を含む。また若干の砂粒を観察される。断面形態は逆台形状を呈するがビット群の中では一番深い。

出土遺物はない。

##### P-005号 (第11図)

単独で円形を呈する。規模は67×71×-35cmである。覆土は褐色土を基調に砂粒をやや多く含む。また、柱が建てられた痕跡が見られ、径15~20cmほどの径が想定される。

出土遺物はない。

これらのビットはおそらく掘立柱建物跡の可能性を持った柱穴であると考えられるが、今回の小規模範囲の調査では限界である。しかし、調査区の西側方向にこれらのビットに伴う柱穴が確認される可能性は状況から推定すると、かなり高い確立で検出されるであろう。

#### 第4節 その他の遺物 (第12図)

遺構に直接伴うものではないが縄文土器を3点ほど出土した。1~3はいずれも口縁部の破片である。1・3はH-001号の覆土上位から出土し、2はH-002号の覆土上位から出土したものである。施文は3点とも斜向の沈線文で、縄文後期の加曾利B3式と思われる。



第12図 遺構外出土遺物

## 第3章 まとめ

中台大木戸遺跡893-5地点では小規模ながら竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟などを検出した。本遺跡周辺では本格的な調査は隣接する石作台遺跡（年報№10）のみで、確認調査だけを上仇市A遺跡で実施しているのみである。このような状況の中、今回の調査成果は周辺地域の集落の様相を把握する資料として、意義は大きいと考えられる。

以下、調査によって得られた成果について述べることにし、まとめとする。

H-001号は3点の墨書土器を出土した。そのうち2点は「東」と判読できる。山武地域での同墨書は成東町の真行寺廃寺で「三川東」が土師器環、底部面に見られ、東金市の南外輪戸遺跡「東宝カ」が土師器環、底部に、中谷遺跡第三地点「崇東」が土師器環、体部にそれぞれ墨書されている。他には旧山辺郡である千葉市土気町の文大第6遺跡において「砂田東寺」が土師器環、底部面に見られる。山武地域以外では袖ヶ浦市境遺跡で「東」が土師器環、体部に墨書され、同市の文脇遺跡でも土師器環、体部に「東□」が見られ、栄町の大畑Ⅱ遺跡で須恵器環、底部面に「東」が見られる。しかしこれらの墨書土器は遺跡数で見ると現在のところ、そう多くは見られない文字資料であることは言えると思う。この「東」を除陽道に関するものとして捉えるならば角形的、東に対して「北・南・西」などの文字資料が当然共伴して見られても良いのであるが、ほとんど出土していないのが現状である。たとえば、東金市久我台遺跡では「南」の墨書が数点出土しているが、その他の関連文字としては確認されていない。また、大網白里町の砂田中台遺跡や大網山田台遺跡群などでも「西」の墨書が見られるがやはり関連文字は確認されていない。このことは単に角形的な意味合いのものとして捉えることは危険性がある。一般に墨書土器についての機能は、文書の下書きや土器の帰属的なもの、魔術的、祭祀的な多様な性格を持ったものとされており、墨書土器の多様性にあらためて難しさを感じる。鉄製品では鎌が2種類出土した。(10・11)は根株切り用のものと推定され、(12)は穂摘用のものである。これらの農耕具だけでは断定しがたい部分はあるが、周辺の狹隘な谷津田においても稲の収穫時期には使用されたことが想起される。H-001号は出土した土器の特徴から9世紀中頃の比較的に早い段階のものであろう。

H-002号では4点の坏が出土した。そのうち3点(1～3)は内外面に黒色処理が施され、漆による表面仕上げを施す、高温硬化法によるものと思われる。器形は扁平な半球状を呈し、口縁部と体部の境に僅かな稜を持つタイプ(1・2・3)と稜を持たない(4)が見られる。特に(3)は内外面漆仕上げ後、内面に再度上塗りをする技法が見られた。この技法は北総地域に散見される技法であり、留意しておきたい。本住居跡は器形の特徴から7世紀の前半代に比定される。

掘立柱建物跡は4棟とも遺存状況が悪いのか、すべて歪んだプランを呈する。また、一辺の中間の柱が確認面では欠けており、ロームまで掘込まれなかったものなのか、または当初から設けなかったものなのかは明らかでない。

以上のように、本遺跡は調査により小規模ながら古墳時代の7世紀前半から平安時代9世紀中頃までの間に集落が営まれていたことが判明した。しかし、集落の様相などについては今回の調査では資料不足のため不明確であり、集落が断続的であるのかまたは継続的であったのかは判然としない。今後の周辺の調査が望まれる。

参考文献

1. 福岡元ほか 1980 『東金台遺跡』『中谷遺跡』 東金台遺跡調査団
2. 村山・中野ほか 1985 『東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡 滝・木浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書』  
菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡調査会
3. 小沢洋 1985 『築遺跡』 鉾君津郡市文化財センター
4. 篠原正ほか 1987 『大畑Ⅱ遺跡』 鉾印旛郡市文化財センター
5. 萩原恭一ほか 1968 『久我台遺跡』 鉾千葉県文化財センター
6. 山本哲也 1992 『文脇遺跡』 鉾君津郡市文化財センター
7. 平山誠一 1994 『砂田中台遺跡』 鉾山武郡市文化財センター
8. 小林・石本 1995 『大鶴山田台遺跡群』 鉾山武郡市文化財センター

# 写真図版



1. 調査前



2. 全景



2号

1号

3. H-001・002号



1. H-002号



2. B-001号



3. B-002·003号



H-001-1



H-001-3



H-001-9



H-002-1



H-002-2



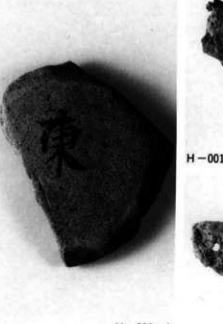
H-002-3



H-002-5



H-002-8



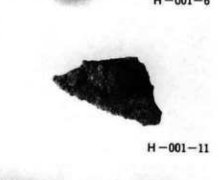
H-001-4



H-001-5



H-001-6



H-001-11



H-001-10



H-001-12



報告書抄録

ふりがな	なかだいおおきどいせき
書名	中台大木戸遺跡 893-5地点
シリーズ名	財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第64集
編著者名	平山 誠一
編集機関	財団法人 山武郡市文化財センター
所在地	〒299-3242 千葉県山武郡大網白里町金谷郷1356-2 TEL 0475-72-3211
発行年月日	西暦 2000年1月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中台大木戸遺跡 893-5地点	山武郡横芝町中台大木戸 893-5	12408	山文セ-149	35度 40分 44秒	140度 26分 28秒	19991012 } 19991019	490	堆肥舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中台大木戸遺跡 893-5地点	集落跡	古墳後期 平安	竪穴住居跡 2軒 掘立柱建物跡 3棟 ピット 5基	土師器、墨書土 器、穂道具	

## 中台大木戸遺跡

893-5地点

---

印刷	平成12年1月20日
発行	平成12年1月31日
編集	財団法人 山武都市文化財センター 千葉県山武郡大網白根町命谷郷1356-2 TEL 0475-72-3211
発行	千葉県横芝町
印刷・製本	株式会社 正文社 千葉県千葉市中央区都町2-5-5 TEL043-233-2235

---